

スキー・ジャンプ再論

冬のスポーツの中で、スキー・ジャンプには何故か特別な関心をもっている。二〇〇三年三月号の本誌で、スキー・ジャンプを解析するという小論を記した。どうして十代の若い選手が突如として表舞台に登場したり、歴代の王者が並の選手に落ち込み、再浮上するのに四苦八苦したりするのかを論じたものだった。

W杯二八勝のシュミット、二〇勝のゴールドベルガー、同じく一五勝の船木和喜、ベテルカは全盛時の面影もなく、今は並の選手になっている。船木にいたっては、海外派遣から外されただけでなく、国内競技会でも下位に甘んじている。二〇〇〇-二〇〇一年のシーズンに突然大化けし、三シーズン、続けてW杯を制したポーランドのマリシユはまたトップランとして頑張っているが、当時の超人的な神通力は完全に失われてしまった。

実力を超える五輪の勝利

W杯(ワールドカップ)のようなシーズンを通した連戦では、もちろん実力が物を言う。シーズンを通してコンスタントな成績を残せなければ王者にならない。ところが、W杯のリーダーが五輪で金メダルを取れる確率は高くない。

ソルトレーク五輪を思い出せばよい。年末年始のジャンプ週間が前人未踏の四連勝という五十年の歴史を塗り替える大記録を達成したハナヴァルトか、前年ほどの力はないがやはり好調なマリシユが、金メダルを争うものと思っていた。ところが、W杯で一勝もしていないスイスの二一歳の童顔アマンが、ノーマルヒルとラージヒルの金メダルをさらってしまった。以後も、アマンはW杯でわずかに一勝しただけで、今日に至っている。いったい、あのジャンプは何だったのだろう。ジャンプ週間の大記録を作り、絶好調で迎えた五輪で金メダルを獲得できなかったハナヴァルトの無念は計り知れない。それも飛行距離が同じで、わず

かなポイント差だ。ノーマルヒルで金メダルを取り損なったハナヴァルトは、ラージヒルでは銅メダルすらとれなかった。彼は今、競技から身を引いている。

トリノ五輪を迎えた時点のW杯リーダーはチエコのヤコブ・ヤンダ。しかし、彼はシーズン初めの好調を維持できずに五輪を迎えたから、メダルは遠かった。他方、W杯で二位につけるヤニ・アホーネンはまさに脂が乗りきった時期に五輪を迎えた。W杯通算三二勝の大記録を持つアホーネンだが、五輪の金メダルがない。今度こそ、金メダル一つは確実だろうと思った。

案の定、ノーマルヒルの一回目で二位につけた時点で、アホーネンの楽勝だと考えた人は多いだろう。一回目にトップに立ったのはロシアのベテラン、ヴァシリエフ。今期は好調を維持しているが、ムラが多くて二回の飛行をまとめることができず、一度もW杯を制したことがない。ヴァシリエフには一回目の結果は重すぎる。だから、アホーネンがふつうに飛べば、筋書き通りで終わるはずだった。ところが、二回目の最長不倒距離に三メートル以上も足りない地点に沈んでし

と一〇〇mを超えた。もし練習なしの一発勝負だったら、メダルを取るのは難しいとしても、原田はトップテンに入れただろう。しかし、公式練習、予選、本戦一回目、二回目と進むうちに、外国のトップ選手は調子上げてきた。ジャンプ台の特性に感覚を合わせてきたのだろう。それについて、原田は次第に距離を落とし、予選で九五mへと距離を落としただけでなく、スキー板の長さの制限にひっかかり、本戦への出場資格を失った。失格しなくても、上位三〇名による本戦二回目の試技へ行けたかどうか。シーズンの不調はそう簡単に修正されない。やはり、奇をてらう選手は選考でなく、若い選手にチャンスを与えるべきだった。

若さと技術は矛盾する

さて、アマンが二つの金メダルをかっさらったソルトレーク五輪だが、明らかに彼の当時の滑走・飛行慣性が、ジャンプ台の最適軌道にぴったり合っていたということだろう。それ以外に考えられない。こういうことが起きるから、トリノ五輪で日本チームがどん底状態の老兵原田をノーマルヒル要員に選んだ。若手が育たない日本チームは二匹目の泥鰌(どじょう)を狙うという博打に出た。

一度失われたジャンプの感覚は短時間では修正されない。ほとんどの選手は一シーズンを通して、感覚を修正するのに苦労している。国内の競技会でも下位に甘んじている原田を敢えて選んだのは、アマンの事例があるからだ。もしかして、トリノのジャンプ台が原田の飛行慣性に合っているかもしれない。事実、練習では一〇〇mを超える選手が少ないなか、原田は三本

ベテランの岡部が復活したように、ジャンプ競技における技術要素のウエイトが高くなっている。ここ数年はヨーロッパ各国の若手選手の台頭で、W杯の上位には新鋭が顔を並べ、日本のベテラン選手の入る余地がなくなっていた。大きくてパワーのある、しかし軽量の選手が上位を占めるようになった。このため、体重によってスキー板の長さを制限して、踏切初速を均等化するルールが導入された。それで技術のある選手が復活した。

しかし、技術だけは勝てない。何が必要なのか。日本の原田(三七歳)、岡部(三三歳)、葛西(三三歳)の年齢合計は百歳を超える。伊東はまだ二歳だが、一戸は二九歳である。多分、五輪ジャンプ団体選手構成で、最高齢チームだろう。ラージヒルを制したモルゲンシュテルンは一九歳、銀メダルのコフラーは二一歳だ。葛西はアホーネンとともに、一〇シーズン以上もW杯に参戦し、コンスタントな記録を残している。

まった。追い風を受けた不運があったのだろうが、風を凌駕する力に欠けた。それが五輪の重圧だろうか。経験と技術に優れたアホーネンが確実に取れたはずの金メダルが、手からこぼれてしまった。同じことは葛西についても言える。アホーネンと同じく、五輪の個人メダルから見放されている葛西にとって、距離の差がつかないノーマルヒルはメダル獲得の最後のチャンスだった。練習では好調を維持していたが、本番ではアホーネンとともに沈んでしまった。これで葛西もアホーネンも、五輪の金メダルは永遠に手の届かないものになった。アホーネンは前シーズンのジャンプ週間三連勝後の第四戦で、コンマポイントの差で四連勝の大記録を逃している。アホーネンにはここ一番で勝利の女神が必要だ。復合W杯三季連続王者で、今期のW杯リーダーでもあるマンニネンもまた、五輪の個人二種目で下位に沈んだ。それほど五輪は魔物なのだ。フィキヤー・スケートのプルシエンコのように他を圧倒する実力を持っていたればまた別だが。それでもやっぱりスキー・ジャンプは水物なのだ。

ジャンプの距離を決めるもの

ジャンプの距離を決める物理法則は、飛び出しのタイミング、飛び出し初速、飛び出し角度、飛行軌道、空中姿勢の五要素である。これらは相互に関連していて、相互に分離できない。初速に大きな差があれば、勝負にならない。タイミングが遅れたり、早かったり

これだけ長く第一線で活躍しているのはこの二人だけだ。それほど、レベルを維持するのが難しい競技だと言える。しかし、その彼らでも、五輪で勝てない。

そこで、若さの要素だが、ジャンプ競技における若さの強さは何か。初速が均等で、後は最適軌道にどれだけ近づけるだけの競技であれば、確かに技術的要素が大きい種目だと言える。しかも、踏切のタイミングは百分の一秒単位だから、その感覚を失うと、元に戻すのが難しい。その視点からも、技術要素が物を言う競技だ。だとすれば、熟練した選手が有利なことが分かる。事実、今シーズンのW杯競技会のトップテンの平均年齢を計算すれば、多分、二〇代半ばになるだろう。にもかかわらず、五輪のような一発勝負で若い選手が強いのは何故か。

初速が同じでも、選手の飛び出しを見ると、明らかにモルゲンシュテルンやコフラーの力強さが違う。それは「うまい」というのではなく、「強い」という表現がびつたりだ。日本のベテラン選手に比べて、飛び出しの力強さが違う。それは踏み切った瞬間の高さと勢いに現れる。その力強さは踏み出す脚力からきている。

ジャンプ台から踏み出すことを、「サツツを切る」という。飛び出しの初速を加速するのが、「サツツ」力。二〇歳前後の若者の脚力は一番強い。その脚力がうまく加速力になれば大ジャンプになる。ここが若い力と技術が矛盾するところだ。言うまでもなく、加速度は飛行曲線の微分係数で表現できる。滑走の初速を加速するためには、飛行曲線の接線の角度の方向へ、脚力を乗せなければならない。それがびつたりと嵌った時に、大ジャンプができる。しかし、加速角度の方向に正確に力を加えるには技術と経験がいるが、怖い物知らずの若者が偶然にその角度を捉える場合がある。それが大ジャンプに大化けする。他方、いったん

若い選手が加速角度の方向を失うと、低速状態からなかなか抜け出られなくなるのである。

ソルトレーク五輪のアマンのジャンプ、トリノ五輪のモルゲンシュテルンやコフラーの二四〇mジャンプはこのように説明できる。しかし、その彼らがこのジャンプを続けられる保証はない。歴代のW杯王者が何季も王者でいられないように。一〇年以上もトップ水準の技量を維持できるアホーネンや葛西は、この競技の世界では非常に稀なケースなのだ。